

松本時代の北杜夫

其の四（資料編）

—— 初期作品関連資料 ——

資料編作成にあたって

拙稿「松本時代の北杜夫」の調査研究を進めていく過程で、筆者が出会った資料中、與曾井湧司宛未公開書簡については、先の「其の三」に整理して考察を加えた。本稿においては筆者が撮影した以下の資料を整理する。

- 1 中野太郎江宅資料（杜夫の松本高校三年時下宿家屋）
- 2 三城牧場・美ヶ原方面及び徳本峠資料
- 3 「北杜夫文庫」の資料
- 4 信州大学附属中央図書館書庫資料（旧制松本高等学校図書館及び思誠寮図書室資料）

調査と資料の掲載に際しては左記の各位から許諾を賜った。
深謝の意を表する。

中野 累子氏（中野太郎江宅資料）
古畑 博子氏（昭和二十年代王ヶ鼻資料）

凡例

I 資料掲載の構成（資料名を写真下部に付与）

- 1 撮影日
- 2 資料の紹介
- 3 平成29年3月以降本誌に発表した拙稿「松本時代の北杜夫 其の一〜三」の主な関連内容（Webページ）
- 4 資料と関連する主な作品・叙述（ページ）

II 初期作品関連資料一覧表

- 1 資料一覧表の項目は、「資料番号」「表題」「撮影日」「平成29年3月以降、本誌に発表した拙稿「松本時代の北杜夫」の主な関連内容」「資料と関連する主な作品・叙述」とした。
- 2 資料番号は、中野太郎江宅資料をⅠ群、三城牧場・美ヶ原・徳本峠資料をⅡ群、「北杜夫文庫」資料をⅢ群、信州大学附属中央図書館書庫資料をⅣ群とし、表題を付与した。

竹内 正（日本歌人クラブ会員）

資料 1 中野太郎江宅



中野宅 (3)



中野宅 (1)



中野宅 (4)



中野宅 (2)

1 撮影日

中野宅 (1)	平成 29 ・ 9 ・ 22
中野宅 (2)	平成 29 ・ 9 ・ 22
中野宅 (3)	平成 29 ・ 9 ・ 22
中野宅 (4)	平成 29 ・ 9 ・ 22

2 資料の紹介

昭和二十二年十月十六日、杜夫は茂吉から「愛する宗吉よ」に始まる手紙を受け取り、動物学志望を断念し医学部を目指す進路選択をした。当時杜夫が手紙を受け取った下宿の中野太郎江宅が現存している(旧住所・松本市県北区二二二六、現住所・松本市埋橋二丁目三の八)。二階建て下宿用六部屋の中野宅は、純和風の佇まいであり、一階正面玄関を境に、入って右側が下宿者用、左側が大家用となっている。現在は太郎江の長男昭一郎も逝去し、妻累子が相続している。

二階北側廊下のガラス窓は昭和二十年代当時のままで、「中野宅(1)」のように窓を開け窓枠に浅く腰を掛けると落ちないように手摺り(欄干)が付いている。部屋の状況は各部屋六畳で「中野宅(4)」のように南側に窓があり、天井は竿縁天井である。累子によると、結婚時は既に太郎江は他界しており、直接当時の話を聞いたことはないというが、「北杜夫さんとお友達の辻邦生さんも一時期一緒に下宿していたと聞きました」と案内の途中で聞き伝えを語った。

中野宅は現在も当時と変わらず旧制高等学校記念館敷地の道を挟んだ西側にある。「役立たずの日記のこと」(『どくとるマンボウ青春記』『北杜夫全集第13巻』(P66))には「三年生になると寮を出て下宿に移る」に始まり、困難な下宿探し、下級生との同居、半

自炊の食生活等、最初の下宿先となった中野宅での様子が描かれている。杜夫はその後、受験勉強に専念させたいという茂吉の指示に従って、十二月には学校の側から若松町若松館に下宿を移した。しかし、「一年間に五回、家移ったことは確かだ」と「銅の時代」(「どく」とるマンボウ青春記」(P.91))に記すように、頻繁に下宿を替え、最終的には「どうとう知人のYさんの家に置いてもらった」(P.91)と、松本に来て最初に世話になった与曾井湧司宅に下宿することになっていった。その後の與曾井湧司と杜夫との親しい関係については「其の三」にまとめた。

3 「松本時代の北杜夫」の主な関連内容(ページ)

- 「四月、三年になり寮を出て下宿(松本市県北区)し、五月には卓球部主将、校友会運動部総務を務め、インターハイ、駅伝に活躍した」(「其の一」(P.37))
- 「外科医にさせたい茂吉の強い反対にあい、初めて父の意志に反抗する手紙のやり取りをした(中略)ついに茂吉に屈服し医学の道を選んだ」(「其の一」(P.37))
- 「昭和二十二年十月で作品が終わっている理由は(中略)成績を心配し「父の歌など讀むな」という茂吉に屈服し、医学部に進学するための勉強をしなければならなくなったからである」(「其の一」(P.39))
- 「昭和二十二年、三年生になると杜夫は寮を出て下宿生活をするようになり、第一章第一節で述べたように日記は九割が詩の形式で書かれ、詩への関心が高まっていった」(「其の二」(P.130-131))
- 「杜夫は昭和二十二年(松本高校三年)九月に、再刊された交友会誌「山脈」に「六脚蟲の世界」を発表した(中略)一篇

執筆当時の杜夫は、同年十月の父茂吉との進路をめぐるのやりとりの直前で、未だ動物学志望を胸に、ファールブルに憧れを抱いていた頃の作品である」(「其の二」(P.132))

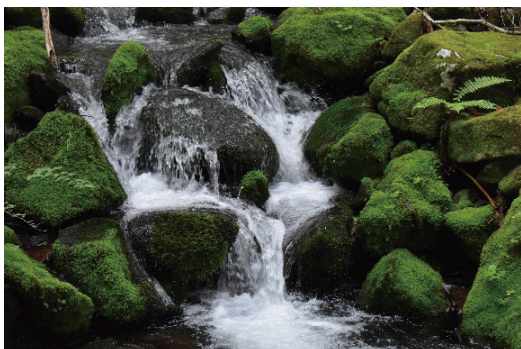
- 「其の二」「一、初期詩篇等の諸相 5 夢の断念」(P.143-157)

- 「其の三」「六、書簡の解釈及び文学的価値 1 書簡の解釈(一) 松本高校在学中の書簡 昭和二十二年」(P.121)

4 資料と関連する主な作品・叙述(ページ)

- 「死」(『北杜夫全集第5巻』(P.238-240))は、昭和三十九年三月の「世界」に発表された杜夫にとっては珍しい私小説である。「創作余話(1)」(『北杜夫全集第5巻』の「付録月報1」)によると、発表当時賛否両論のあった作品であるが、「川端康成氏からお手紙で讃められたことが記憶に残っている」という。一篇は茂吉の臨終の前後の様子を回想風に描いており、杜夫が動物学志望を断念した時の茂吉の手紙が克明に紹介され、冷静な筆致で描かれた鎮魂の作品となっている。

- 「役立たずの日記のこと」(「どく」とるマンボウ青春記」『北杜夫全集第13巻』(P.66-68))
- 「銅の時代」(「どく」とるマンボウ青春記」『北杜夫全集第13巻』(P.90-91))
- 「I「小園」「白き山」時代12」(『茂吉晩年』(P.119-130))



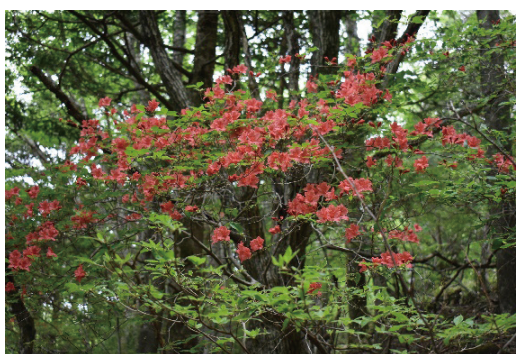
美A-3 広小場 (1)



美A-1 三城牧場 (1)



美A-4 広小場 (2)



美A-2 三城牧場 (2)

1 撮影日

美A-1 三城牧場 (1)	平成30・6・10
美A-2 三城牧場 (2)	平成30・6・10
美A-3 広小場 (1)	平成30・6・10
美A-4 広小場 (2)	平成30・6・10

2 資料の紹介

昭和二十年六月二十八日から昭和二十二年七月七日にかけて、杜夫は九回「入山辺―三城牧場―美ヶ原―王ヶ鼻」方面の昆虫採集に出かけている。資料2は杜夫が初めて昆虫採集に出かけた季節の風景である。杜夫はその六月の体験を『少年』『幽霊』『神々の消えた土地』等の素材として描いている。三城牧場から美ヶ原への登山道は西側の「タデ河原」コースもあるが、杜夫は昆虫や植物が豊富で、溪流もあり景色も美しい「広小場・百曲り」のコースを作品に多く描いた。現在の整備された登山道や立ち入り禁止の牧場とはやや異なり、当時は牧場を横切り、沢沿いに登っていったものと思われる。

「美A-1」は三城牧場から王ヶ頭、板状節理、烏帽子岩を仰いだ風景であり、写真中程右の急斜面には所々にツツジが群生していた。「美A-2」は三城牧場の登り始めの道端で時々見かけた満開のツツジである。牧場から広小場への登山道沿いには、「美A-3」のように細い水流が苔生した岩間を勢いよく流れていた。「美A-4」の広小場は現在ではキャンプやバーベキューにも利用され、休憩用の東屋も設置されている。写真右側の木立の下には今も当時と変わらない水流と浅い淵があり、『少年』や『神々の消えた土地』に描かれた場面を彷彿とさせる。登山口から四十分程の場所である。

3 「松本時代の北杜夫」の主な関連内容(ページ)

○「六月二十四日 王ヶ鼻へ。(寂光)②」「其の一」「四、『寂

光』の解釈 1『寂光』の構成(1)昭和二十年の構成(P.57)

- 「信州の昆虫たちと初めて出会った時のことが描かれ、当時の嬉しかった想いが回想される」(『其の二』「二、初期詩篇等の様相 3ファールへの憧れ(2)随想「蟲と共に」」(P.129))

- 「友達と美へ」(『其の三』「五、書簡公開」(P.99))

- 「六月二十四日、王ヶ鼻登頂、その後寮が閉鎖」(『其の三』

「六、書簡の解釈及び文学的価値 1書簡の解釈(1)松本高校在学中の書簡」(P.120))

4 資料と関連する主な作品・叙述(ページ)

- 「昭和二十年」詞書、短歌二首(『寂光』)

- ・「初の日曜日、私は一人で三城牧場から王ヶ鼻に登った。歌集としては順番が前後するが、私のノートにはそうなっている。／岩ばかりなるこの山頂に黒土の露出せるあり言の葉も絶ゆ／昏れゆきて水音のみ高きこの峽の日影となりぬくる降りゆきけり」(P.17)

- 「昭和二十二年」短歌八首(『寂光』)

- ・「五月二十日 三城牧場／くわつこうの声を寂しみ落葉松の細枝の散る道を来にけり／いとけなき者のごとくに山の道に淡きすみれを手帳にはさむ」(P.130-132)

- 「少年」(『北杜夫全集第1巻』)

- ・「これから三城牧場を経て美ヶ原という高原までゆくのだから、あまりゆっくりしているわけにもいかない(中略)地味な色あいのむこうに、みどりをしきつめた牧場が見えた。点々とつじが紅く芝生をつづっている(中略)山水のながれているところで、飯盒で御飯を炊くことにした」(傍点作者)(P.142)

- 「幽霊」(『北杜夫全集第3巻』)

- ・「王ヶ鼻の頂きまでは……そうせ、あと二時間ほどだね。おらは先へゆくで、まあ、ぼつぼつ行きましょ」(P.29)

- 『神々の消えた土地』

- ・「この道を登って行くと、すぐ溪流ぞいになるのよ。それから、三城牧場から美ヶ原への登り口には、小さな滝もあるのよ。分かった、ダフニス」(P.176)

- ・「やがて、さきほど彼女が言っていたように、細い溪流沿いの道となった」(P.179)

- ・「意外に早く、三城牧場の柵が見えた」(P.184)

- ・「ずっと、和やかな芝生の園が続いていた。それからツジが真赤な花をつけていた。あちこちに、その群落がかたまっていた」(P.185)

- ・「ほらね、あれがオリンポスの山の花よ。ちょうど今が盛りね」(P.186)

- ・「近づいてみると、それはべつに滝でも泉でもなかった。上方の岩場から、細い水流がかなりの勢いで流れ落ちているのに過ぎなかった」(P.186)

- ・「それから、水流のところへ行き、自分にも分からぬ闇雲な衝動から、その水をすくって全身にあげせかけた」(P.187)



美B－3 展望コース



美B－1 登山道（1）



美B－4 西側斜面



美B－2 登山道（2）

1 撮影日

美B－1 登山道（1）	平成30・6・10
美B－2 登山道（2）	平成30・6・10
美B－3 展望コース	平成30・6・10
美B－4 西側斜面	平成30・6・17

2 資料の紹介

資料2につづき、「美B－1」は広小場から始まる百曲り（ふじさわ道）の登山道である。足元には薄い板状の鉄平石が露出し崩れやすく、やや急な九十九折となっていく。約八十～百三十五万年前の美ヶ原には富士山のような美しい成層火山がいくつか聳えていたが、やがて火山活動が終り、浸食作用が進み、火山の大部分が削られ現在のような準平原（メサ地形）ができたという（「美ヶ原の自然観察」（土田勝義編集、昭和59）。鉄平石は美ヶ原がかつて火山であったことを物語っている。

百曲りを一時間半程登ると徐々に視界が開け、右手斜面には「美B－2」の様な未だ蕾のツツジをあちこちに目にする。その後十五分程で「塩くれ場」（牛が塩を舐める場所）、美ヶ原牧場の西南端に着く。そこから王ヶ頭までは「美B－3」の様に四十分程のなだらかなアルプス展望コースとなる。晴れていると眼下に松本市街地を見渡せ、遠くは穂高岳や槍ヶ岳をはじめとした北アルプス連峰を望むことができる。とりわけ途中の烏帽子岩からの展望は大パノラマである。

「美B－4」は王ヶ頭側から写した西側斜面である。中央には美ヶ原のグランドキャニオンと言われ、崩れ落ちるような崖が見られる。天候が良いと遠い白雲の上に富士山を遠望することができる。

3 「松本時代の北杜夫」の主な関連内容(ページ)

○ 資料2に同じ。

4 資料と関連する主な作品・叙述(ページ)

○ 「少年」(『北杜夫全集第1巻』)

・ 「百曲りと呼ばれるつづら折りの径をやつとのもので登りきり、美ヶ原へついたのはそれでもまだ正午すぎであつたろうか(中略)ここではまだつつじは蕾であつた。人影はむろんない。樹一本見えぬ。ただ蒼空と、ゆるやかな起伏をもつた高原である。じつとしているものがなくなるので、せかせかと歩いた。もうじき高原のはずれとなる小高い場所で、ぼくは草の上に腰をおろした」(P.41)

○ 『神々の消えた土地』

・ 「そこから先は三城とは打って変つて、岩の多い登り道となつていた」(P.191)

・ 「岩と灌木の道から、いきなり平たい草原に出た。見渡すかぎり、それは拡がつていた。そして、ここにも赤いツツジがあちこちに群れ咲いていた。だが、三城が満開なのに比べ、ここではようやく花が開いたという差があつた」(P.191)

・ 「ここが美ヶ原か。思っていたよりずっと素晴らしい。あつちが王ヶ鼻か」と、登りだしてから初めて、私は口をきいた。遙か彼方に、残雪でおおわれた北アルプスが連なっていた。そして、その背後に日が沈もうとしていた。残照が高山の群を影絵のように浮びあがらせていた」(P.191)

・ 「あつちのはずれが王ヶ鼻よ。でも、山小屋は反対側にあるの」(P.192)

・ 「草原はあくまでも平らかに、涯のないほど広がっていた。

途中、放牧されている数十頭の牛の群れに出会った。また少し離れた場所に、数頭の馬もいた。いずれも首をたれて草を食べながら、私たちを見ても、じつとしていた」(P.192)

○ 「幽霊」(『北杜夫全集第3巻』)

・ 「王ヶ鼻の頂きまでは……そうせ、あと二時間ほどだんね。おらは先へゆくで、まあ、ぼつぼつ行きましよ」ぼくの間にこたえて彼はそういうながら、背の粗朶をゆりあげてゆつくりと登っていった。ぼくはだまって頭をさげ、彼がひと足ひと足うごかしてゆく後姿をしばらく見送った。小径はじきにじぐざくに曲りくねった急勾配になってきた。喘ぎながら、それでも疲れたぼくの足はひとりでに登ってゆき、ぼくのころは一層しんとなってさまさまのことを考えているようだった。ぼくの目はそのうちにも次第に変つてゆく自然のありさまをとらえていた。小径が小石まじりとなり、灌木の茂りがしばしば行く手をさえぎった。エゾアカヤマアリの大きな巣にいくつか出くわしたが、強い匂いのする蟻酸をばくこの蟻は、道ゆく者の足にしつこく這いのぼつてくるのだつた」(P.29)

・ 「ううん、松本の親類んちに遊びにきたんだけど、明日はもう帰らなくちゃ……。ねえ、三城牧場まで一緒にいかない？ そうだと素敵なんだがなあ」(P.91)



美C-3 王ヶ頭石神像



美C-1 王ヶ頭ホテル前



美C-4 昭和20年代王ヶ鼻



美C-2 イワツバメ

1 撮影日

美C-1 王ヶ頭ホテル前	平成30・6・17
美C-2 イワツバメ	平成30・6・17
美C-3 王ヶ頭石神像	平成30・6・17
美C-4 昭和20年代王ヶ鼻	平成30・7・30

2 資料の紹介

「美C-1」は早朝の王ヶ頭ホテル前から美ヶ原牧場を撮影した。右側の崖は雲海に覆われているが、しばらく前までは、雲が流れるように美ヶ原に這い上ってきていた。「美C-2」は同じくホテルの前の撮影である。『神々の消えた土地』のクライマックスには主人公則雄が「あれば、イワツバメだよ」と知子に教える場面がある。撮影当日は前夜の雨もやみホテルの底に巣を作る沢山のイワツバメが水溜から土を嘴にくわえ飛び交っていた。イワツバメは谷の上昇気流を巧みに使い、繰り返し泥を運んでいた。

「美ヶ原」は大正十年に登山家の木暮理太郎が「山岳」（日本山岳会会報）に紹介したことにはじまり、古くから牧草地として利用され、江戸時代には山頂より御嶽山が展望できることから山岳信仰の山ともなった。王ヶ頭（2034m）には鳥居や「美C-3」の様な石神像等が、王ヶ鼻（2008m）には石神像群がそれぞれ御嶽山の方角を向いて立っている。

「美C-4」は写真家の故古畑友視（大正9・12・17生）が昭和二十年代に王ヶ頭側から王ヶ鼻を撮影し、その後、尾崎喜八の詩額「美ヶ原」に添えられた当時を物語る貴重な写真である。今日王ヶ頭から王ヶ鼻へ向かう登山道の道端にはコメツガやモミ、シラビソ等の亜高山帯の高木やクマザサ、レンゲツツジをはじめとした低木が混生している状況が見られる。しかし、杜夫が訪れた昭和二十年代

当時は資料のように、王ヶ鼻の頂に向かう一本道の両側に高木は確認できず、比較的平坦なツツジ等の灌木や草地であったことが分かる。写真上部には湧きのぼる雲の彼方に北アルプスの雪渓が確認でき、『幽霊』第三章で主人公「ぼく」が目にしたであろう光景が連想される。本資料は現在長女古畑博子(松本市波田「喫茶ブレイエル」)が所有している。

3 「松本時代の北杜夫」の主な関連内容(ページ)

○ 資料2に同じ。

4 資料と関連する主な作品・叙述(ページ)

○ 「幽霊」(『北杜夫全集第3巻』)

・ 「夕刻ちかくなつて、ぼくはしなびた蔵を数本片手でうちふりながら、ゆるやかな起伏をなしている高原を王ヶ鼻の頂きへむかつて歩いていた。松本平からみると怪異な巖のような山容ですぐに目にたつこの山は、美ヶ原とよばれる高原の果てるひとつの突起にすぎないが、ぼくにとっては懐かしい山——この地にきてはじめて登った憶い出の場所であった。岩の畳まれた名ばかりのせまい山頂には、あのとときと同じ石像が祭っており、多少の感傷をよみがえらせた。ただ以前と異なっているのは、ずっと季節が早いだけに、西方の波濤のように遠望されるアルプスの峰々が、まだうそ寒い色にくすんでいたことだ。あちらの隆起、こちらの陥没に冬の化粧のあとが残っていたし、全体をうっすらと霞ませてしまう靄ともつかぬ水蒸気のひと群が、谷間谷間にたゆたっていた。王ヶ鼻の西端はふかい崖となり、その先からだらだらと雑木や植林をすそびかせながら、平らかな下の盆地につながっている。あのととき、ぼくはこの方角から登ってきたのであった」

(P.93)

○ 『神々の消えた土地』

・ 「あつちのはずれが王ヶ鼻よ。でも、山小屋は反対側にあるの」(P.192)

・ 「二人は王ヶ鼻のほうへ向った。クロエーは大きなツツジの灌木のかげに隠れた」(P.194)

・ 「ほどもなく、二人は美ヶ原のはずれにある王ヶ鼻に到着した。そこだけ岩が露出していて、石碑が立てられていた。二人は石碑の前に坐った。そこからは、下界の松本平と、その向うに連なる山脈の眺望が恣にできた」(P.195)

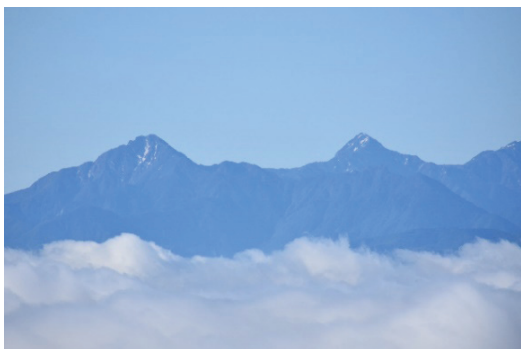
・ 「少女は、イワツバメの飛翔を眺め、不意に黄色いスミレに口づけした」(P.196)

・ 「そこは大きな灌木のかげで、いくらかの草地になっていた」(P.197)

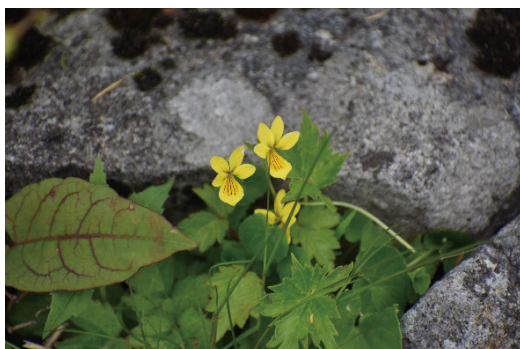
○ 「どくとるマンボウ青春記」(『北杜夫全集第13巻』)

・ 「ある先生は末端肥大症と噂され、鼻の頭も怪異にふくれていた。そのため松本の東方に聳えるこつい岩山の名である「王ヶ鼻」と呼ばれていた」(P.37)

・ 「私は徒らに信州の自然の美しさを讃え、かつ完全にあがついて、「朝日の昇るアルプスを見るにつけ、夕日の沈む王ヶ鼻を見るにつけ(事実はこの逆である)」などと述べたりした」(P.82)



美D-3 王ヶ鼻から北アルプス



美D-1 キバナノコマノツメ



美D-4 王ヶ鼻の石神像群



美D-2 王ヶ鼻

1 撮影日

美D-1 キバナノコマノツメ	平成30・6・16
美D-2 王ヶ鼻	平成30・6・16
美D-3 王ヶ鼻から北アルプス	平成30・6・17
美D-4 王ヶ鼻の石神像群	平成30・6・16

2 資料の紹介

王ヶ鼻から西方に岩場を下り緩やかな灌木の道を三十分程行くと王ヶ鼻に到着する。「美D-1」は岩場の道端に咲いていたキバナノコマノツメである。『神々の消えた土地』の則雄の父が「同じ細胞からできている」と手紙に書いた可憐な高山の植物であり、一篇の佳境においては、則雄（ダフニス）が知子（クロエー）に捧げる印象的な花として描かれる。その名前にはスミレがつかないがスミレ科の一種で、黄色く葉の形が馬の蹄に似ていることからその名がついた。

王ヶ鼻の山肌は「美D-2」のように板状摂理（板状の鉄平石が幾層にも重なった地形）があちこちに露出している。写真中央に岩の塊が突き出ている様子が確認できる。「王ヶ頭」と「王ヶ鼻」の由来は麓の松本市内から眺めると、「王ヶ頭」は冠を戴いた王様の顔に、「王ヶ鼻」はその鼻のように見えるからと言われている。

山頂からは眼下に松本の市街地が見下ろせ、彼方には北信五岳の山々、北アルプスの峰々や乗鞍岳、南アルプス連峰、富士山、そして八ヶ岳連峰と、大パノラマの展望が広がっている。「美D-3」は早朝の雲海に聳える北アルプスである。

「美D-4」は王ヶ鼻の石神像群である。頂上からは王ヶ頭にもまして木曽御嶽山の眺望が良く、石像はいずれも御嶽山の方を向いて立っている。

3 「松本時代の北杜夫」の主な関連内容(ページ)

○ 「則雄の「大自然とこの自分とが一体のものだ」という認識は、まさしく『朝の螢』の「螢」の一首に込められた茂吉の思いと一脈通ずるものがあり、杜夫が生きていることへの意志を抱いていく姿と重ねて受けとめることができる」(「其の一」「三、文学開眼から詠草へ」3『朝の螢』との出会い(3) 悲傷から係恋へ」(PP.51-54))

○ 「王ヶ鼻登山道で多く見かけたエゾアカヤマアリ」(「其の二」「二、初期詩篇等の様相」3ファールへの憧れ(2) 随想「蟲と共に」(P.129))

○ 「王ヶ鼻山頂付近の六月の草原の「かそかな昆虫の世界」(「山脈」P.38)に観られる生存競争を描いている」(「其の二」「二、初期詩篇等の様相」3ファールへの憧れ(4) 随筆「六脚蟲の世界」(P.132))

4 資料と関連する主な作品・叙述(ページ)

○ 「幽霊」(『北杜夫全集第3巻』)

・ 「うつとうぼくは、岩ばかり畳まっているなかにわずかに黒土の露出した山頂にたどりついた。中央に平たい石がうず高く積まれていて、いくつかの石像が祭られてあった。その背後には、美ヶ原とよばれる高原がゆるやかな起伏をみせて続き、そしてぼくの登ってきた方角には、松本平の盆地をはさんで、はるかに波濤のようにつらなっている北アルプスの山脈が望まれた」(P.30)

○ 『神々の消えた土地』

・ 「信州ならそれほど食糧難ではないでしょう。なによりも、お父さんも大好きだった大自然がある。休暇の日に、まず近

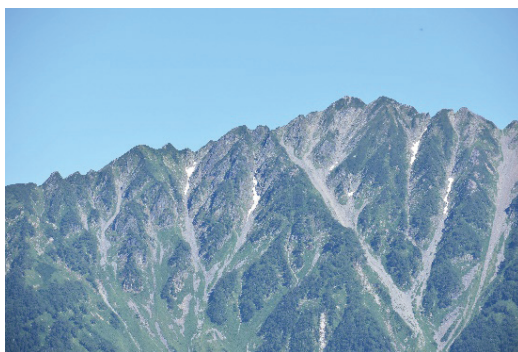
く的美ヶ原へでも行ってみなさい。王ヶ鼻という岩山のうしろの草原がそうです。もし薄黄色のスミレを見つけたら、押花にでもして送ってください。草地よりも瓦礫地帯に多い。これはキバナノコマノツメと言って、お父さんが高校一年のとき、初めて美ヶ原に登って採集した懐かしい高山植物の一つです。あそこらを飛んでいるツバメはイワツバメと言って、やはり高山に特有な種類です(中略)おそらく感傷的な気持ちにもなることでしょう。そのときは大自然のことを考えてください。もともと人間は、大自然から産れたものですから。そして、お前もイワツバメもキバナノコマノツメも同じ細胞からできているものなのです」(PP.161-162)

・ 「ふと側方を見やった。荒れた瓦礫地帯に、黄色い花が咲いていた。近づいて見ると、もはや疑いようがなかった。父の手紙にあった高山のスミレ、キバナノコマノツメに間違いなかった。付近を探すと、今度はかなりの群落が見つかった」(PP.195-196)

・ 「そして、すぐ向うにいる少女に呼びかけた。「クロエー。ぼくが君に捧げる花だよ、これ」彼女は手渡された花を見て、感嘆の声をあげた。それから、いぶかしげに私の顔を見た。「これ、スミレね。どうしてこんなに黄色い色をしているの?」(P.196)



徳本3 徳本峠小屋 (1)



徳本1 西穂高岳



徳本4 徳本峠小屋 (2)



徳本2 明神岳と西穂高岳

1 撮影日

徳本1 西穂高岳	平成30・7・31
徳本2 明神岳と西穂高岳	平成30・7・31
徳本3 徳本峠小屋 (1)	平成30・7・31
徳本4 徳本峠小屋 (2)	平成30・7・31

2 資料の紹介

昭和二十二年十月十六日の茂吉の手紙によって動物学志望を断念した杜夫は、徳本峠から穂高岳の偉容を見れば神経衰弱から回復できるのではないかと考え、独り晩秋の徳本峠に出かけた。当時の情況は『どくどるマンボウ青春記』に詳しく、杜夫は島々谷から徳本峠へと向かったものと思われる。このコースは上高地へのクラシックルートと言われ、その昔「日本アルプス」の名付け親であるウォルター・ウェストン夫妻が上條嘉門次の案内で歩いたコースで、高村光太郎、芥川龍之介も越えた峠道である。秋の溪谷に染まる紅葉が美しい。松本高校時代の杜夫は島々・上高地方面には九回昆虫採集に出かけており、初めて與曾井豊と訪れた時の沢渡方面からのコースとともに島々谷からのコースも馴染みのコースになっていたと思われる。

「徳本1・2」は徳本峠から見た西穂高岳である。峠に立つと高い岩峰が目交いに迫り、その迫力に圧倒的される。「徳本2」の右手前の稜線は明神岳である。「徳本3・4」は徳本峠小屋。「徳本4」の中央新館宿泊棟（平成21建築）に隣接され、左側に丸太で支えられている古い建物（大正12建築）が当時杜夫の訪れた小屋である。現在は資料館として当時の様子を伝え、日本の登山史を語る貴重な建物となっている。

3 「松本時代の北杜夫」の主な関連内容(ページ)

- 「茂吉の強制に動物学を断念するが、神経衰弱になり」(「其の一」)「一、杜夫と茂吉の年代記 4 昭和二十二年」(PP.37-38))

- 「採集方面別の回数は松本市街地8回、入山辺・三城・王ヶ鼻方面9回、島々・上高地方面9回となりほぼ同回数である」(「其の二」)「初期詩篇等の様相 3 ファーブルへの憧れ(1) 昆虫採集の概要」(PP.127-128))

4 資料と関連する主な作品・叙述(ページ)

- 「幽霊」(『北杜夫全集第3巻』)

・「いわゆる日本アルプスと呼ばれる山脈が、つらなりあい重なりあい、雄勁にまた優美に、荒けずりにまた手をこませて、この土地に天をめざして屹立していた。事情のゆるすかぎり、すなわちいくらかの食糧さえ手にはいれば、僕はこの山中にわけいり、溪流をさかのぼり、尾根を縦走した。今になって顧みれば、それはまったく若者の無鉄砲な単独行とってよかったであろう。日程もきめず、捨縄をつかって岩壁をすべりおりたり、そこらの岩かげに山岳部から借りうけたシュラフ・ザックのなかにまるまって一夜をあかした。弱い体力を、ただ理由もわからぬいらだたしさで鞭うち、突兀とした冷たいねずみ色の岩を攀じたのである。三米ほど墜落したこともあったが、血をにじませただけで骨も折らずにすんだ(中略)骨の髄まで凍えさせたこともあった。季節はずれのこととて、たどりついた小屋には寝具もなく、ひと晩中悪寒がとまらなかった。そうした僕のすがたは、わけもない内奥の力に追われてさまよいまわる獣の姿にも似ていた

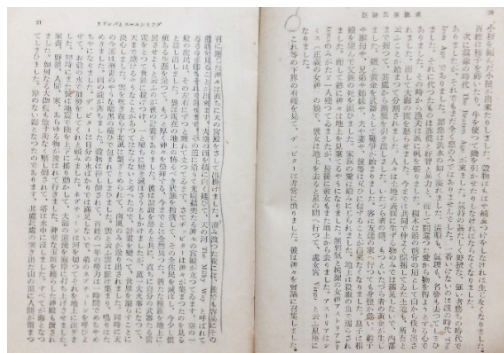
かも知れない」(P.96)

- ・「だがやがて、しずかに落ち着いた秋の日がやってくる——すぐ間近に凋落と凝結を暗示しながら。すっかり黄いろくなったダケカンバのひと葉がふと梢をはなれると、みる間に谷中の黄葉が数知れず散りみだれる。そしてようやく吹きおこってきた風に体をもたせて、堅く濃く晴れあがった空の青みのなかを漂うのだ」(P.101)

- 「つぐとるマンボウ青春記」(『北杜夫全集第13巻』)

- ・「ここで私が少なからず神がかり的であったのは、一人で穂高を見たなら、おそらくこの鬱々たる心情も回復するであろうと自ら信じたことである。そこで私はリュックザックに乏しい食料をつめ、島々行き電車に乗った。島々宿場から郵便局の横を右手に折れる。これがバス道路とは別の、徳本峠を越える道であった(中略)徳本峠の上から眺める穂高は絶品でもある(中略)そしてついに私は峠の頂きに立ち、眼前に立ちはだかる穂高の偉容を見た。前穂の岩壁は午後も遅い斜光を受けて白茶けて見えた。一点の雪もない穂高、永劫の風化にさらされ洗われた大岩塊は、圧倒的に巨大にすぎ、それを眺める私はあまりに微小な存在にすぎなかった。このとき、私の神経衰弱状態は嘘のようにあらかた消失した。今から考えれば、適度の運動療法と自己暗示のようなものであったろう」(P.89)

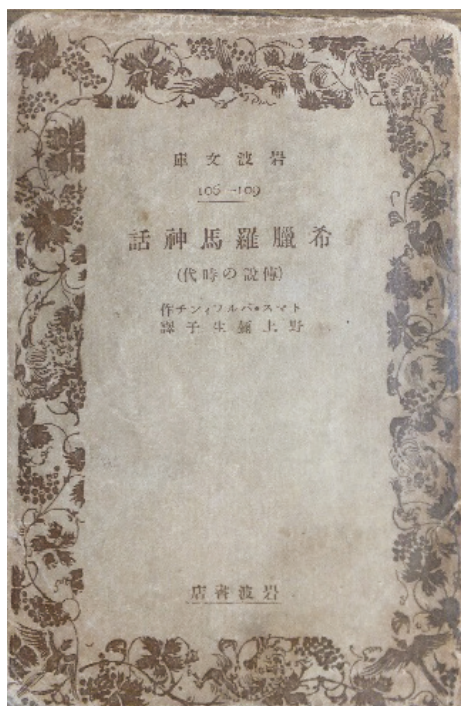
資料7 「北杜夫文庫」 『希臘羅馬神話』・書架



北文庫2－『希臘羅馬神話』(2)



北文庫3－書架



北文庫1－『希臘羅馬神話』(1)

1 撮影日

北文庫1・『希臘羅馬神話』(1) 平成29・9・22

北文庫2・『希臘羅馬神話』(2) 平成29・9・22

北文庫3・書架 平成31・3・28

2 資料の紹介

「北文庫1・2」は杜夫が生涯愛読し、「北杜夫文庫」(信州大学附属中央図書館に創設(平成27・7))に齋藤家から寄贈された杜夫書斎の一冊である。表紙や各ページには杜夫の指跡があり、熟読の程が窺える。既に表紙の「のど」部分が外れかけており、各ページには杜夫の傍線や書き込みが見られる。作品執筆時の基礎資料であったと考えられる。

3 「松本時代の北杜夫」の主な関連内容(ページ)

○ 「その心境は『ダフニスとクロエ』を素材として描かれた『神々の消えた土地』にと結実している」(「其の一」三、文学開眼から詠草へ 3 『朝の螢』との出会い(3) 悲傷から係恋へ」(P.51))

4 資料と関連する主な作品・叙述(ページ)

○ 「少年」(『北杜夫全集第1巻』)

・ 「ぼくはおそらく蒼ざめて、またたきもせずしずかに首をまわし、この大景観に見とれつくした。すでに神話の世界に生きている自分をぼくは感じた(中略)——ギリシャ神話のしめす、ひとつの天地創造説のことを」(P.158)

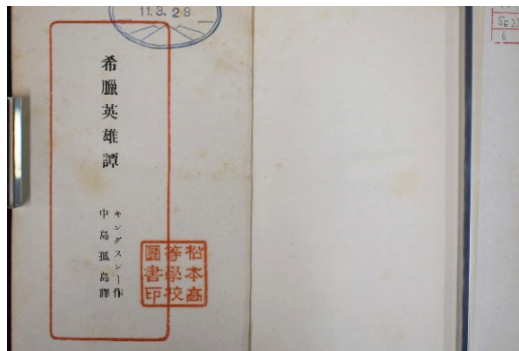
○ 『幽霊』のクライマックス、『神々の消えた土地』の「ダフニスとクロエ」、「幼いメルクリウス」、「牧神の午後」等初期作品の重要な素材として描かれた。



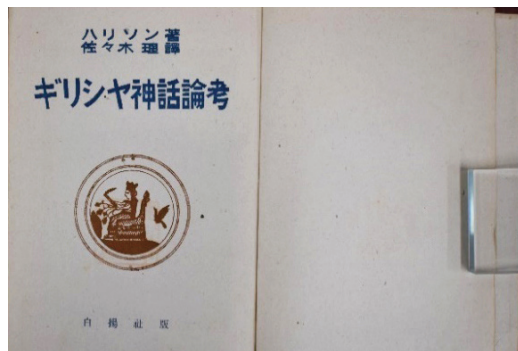
信大書庫 A - 3 『ギリシヤ神話論』等



信大書庫 A - 1 書架 (旧松)



信大書庫 A - 4 『希臘英雄譚』



信大書庫 A - 2 『ギリシヤ神話論考』

資料 8 信大書庫 A 信州大学附属中央図書館書庫

1 撮影日

信大書庫 A - 1 書架 (旧松) 平成 30・6・11

信大書庫 A - 2 『ギリシヤ神話論考』 平成 30・6・11

信大書庫 A - 3 『ギリシヤ神話論考』等 平成 30・6・11

信大書庫 A - 4 『希臘英雄譚』 平成 30・6・11

2 資料の紹介

本書庫には旧制松本高等学校図書館及び思誠寮図書室の蔵書が保管されている。戦後の移館の際、紛失したものもあり、現在確認できるギリシヤ神話関連の書籍は、『ギリシヤ神話論考』『希臘英雄譚』『希臘神話及北歐神話』の三冊である。杜夫が『少年』に描いた「図書室から借りだした数冊のギリシヤ神話」にこれらも該当すると考えられる。「信大書庫 A - 4」には「松本高等学校図書印」がある。

3 「松本時代の北杜夫」の主な関連内容(ページ)

○ 資料 7 に同じ。

4 資料と関連する主な作品・叙述(ページ)

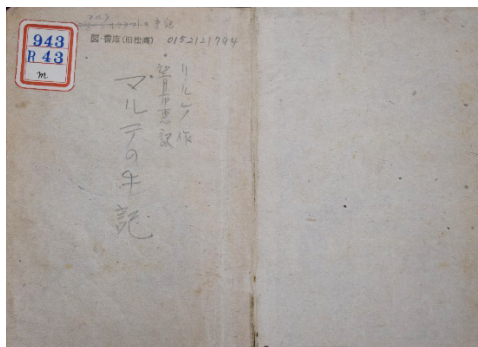
○ 「少年」(『北杜夫全集第1巻』)

・ 「すっかり憂鬱になって、ぼんやりと図書室から借りだした数冊のギリシヤ神話を読み返してみた」(P.27)

○ 『神々の消えた土地』

・ 「ただ私は、夜空に輝く星々があまりにきらびやかであったので、図書室から「星と神話」という本を持ってきて読み耽った。先輩たちの会話によると、彼らは実にさまざまな読書をしているらしいが、知子のためにまずギリシヤ神話を読んだ私は、それと星々との関係を知ろうと思ったからである」(P.145)

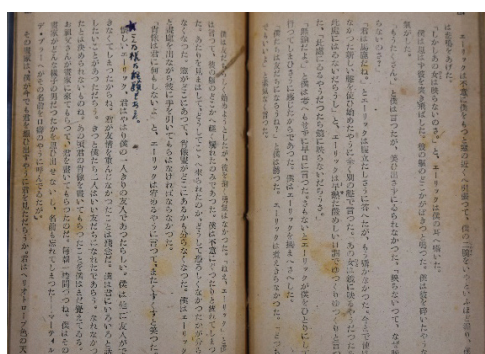
資料 9 信大書庫 B リルケ 『マルテの手記』



信大書庫 B-3 『マルテの手記』 (3)



信大書庫 B-1 『マルテの手記』 (1)



信大書庫 B-4 『マルテの手記』 (4)



信大書庫 B-2 『マルテの手記』 (2)

1 撮影日

- 信大書庫 B-1 『マルテの手記』 (1) 平成 30・6・11
 信大書庫 B-2 『マルテの手記』 (2) 平成 30・6・11
 信大書庫 B-3 『マルテの手記』 (3) 平成 30・6・11
 信大書庫 B-4 『マルテの手記』 (4) 平成 30・6・11

2 資料の紹介

杜夫は昭和二十一年三月の望月市恵との出会いによってトーマス・マン、リルケへの道を開かれた。「信大書庫 B」は望月市恵訳の『マルテの手記』である。装丁の傷みやページの染み、書き込み等からも、杜夫を含め多くの松本高校生らが愛読した一冊と思われる。

3 「松本時代の北杜夫」の主な関連内容(ページ)

- 「其の一」「一、杜夫と茂吉の年代記 3 昭和二十一年」(P.36)
 ○ 「其の二」「二、初期詩篇等の様相 4 精神的思春期 (2) トーマス・マン、リルケとの出会い」(PP.134-143)

- 「其の三」「六、書簡の解釈及び文学的価値 2 書簡の文学的価値 (1) 書簡の解釈的側面」(PP.129-133)

4 資料と関連する主な作品・叙述(ページ)

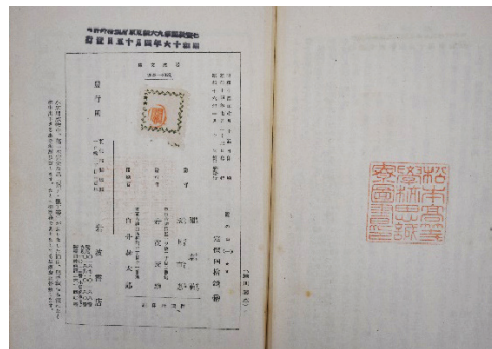
- 「I つゆじも時代」(『壮年茂吉』)
 ・ 「そこで私はつい調子に乗り、望月市恵先生からの耳学問を述べ立てた。「リルケは、いかなる主観も、この世には必ずそれを表す客体があると云っています」すると父は、「ほう、お前は大したことを知っているな」と一旦は感服したが、たちまちにして声を荒げた」(P.58)



信大書庫C-3『魔の山』(3)



信大書庫C-1『魔の山』(1)



信大書庫C-2『魔の山』(2)

資料10 信大書庫C トーマス・マン『魔の山』

1 撮影日

信大書庫C-1『魔の山』(1) 平成30・6・11

信大書庫C-2『魔の山』(2) 平成30・6・11

信大書庫C-3『魔の山』(3) 平成30・6・11

2 資料の紹介

現在確認できる『魔の山』(關泰祐・望月市恵訳、岩波文庫)は一、四、五、六の四巻のみである。表紙と奥付前ページには「松本高等学校思誠寮図書印」が確認できる。杜夫が「『魔の山』の思い出」「人間とマンボウ」「北杜夫全集第15巻」(P.80)に「ついに私までが読んだ」と記した『魔の山』は本資料であったと考えられる。

3 「松本時代の北杜夫」の主な関連内容(ページ)

○ 資料9「其の二」(PP.134-143) 2同。

○ 「其の三」六、書簡の解釈及び文学的価値 2書簡の文学的価値(1)書簡の解釈的側面(PP.129-137)

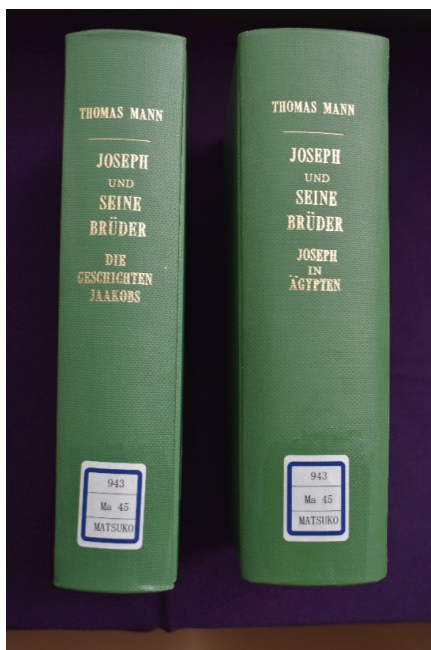
4 資料と関連する主な作品・叙述(ページ)

○ 「どくとるマンボウ青春記」(『北杜夫全集第13巻』)

・ 「先に『魔の山』という名を記したが、トーマス・マンのこの大長篇は、下界、外界から隔絶されたスイスのダヴォスにある結核療養所が舞台である。ここにありとある人種が集まって、息の長い比較するものとなない物語は進行してゆく。ところで、高校の寮とは、小規模な一種の『魔の山』ともいえないであろうか」(P.61)

・ 「私は松本へ行くたびに、松高の図書館からマンの小説を借り、そここの好きな箇所を、自分の本の余白にびっしりと筆写した」(P.131)

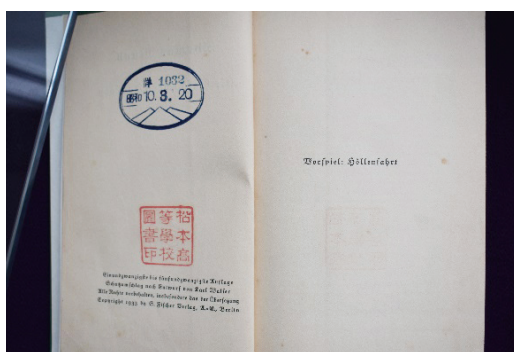
資料11 信大書庫D トーマス・マン『ヨゼフとその兄弟』



信大書庫D-3『ヨゼフとその兄弟』(3)



信大書庫D-1『ヨゼフとその兄弟』(1)



信大書庫D-2『ヨゼフとその兄弟』(2)

1 撮影日

信大書庫D-1『ヨゼフとその兄弟』(1) 平成30・7・30

信大書庫D-2『ヨゼフとその兄弟』(2) 平成30・7・30

信大書庫D-3『ヨゼフとその兄弟』(3) 平成30・7・30

2 資料の紹介

杜夫が『幽霊』に挿話として描いた「学校の図書館の、書庫に
 いての出来事」(『北杜夫全集第3巻』(P.105-106))で、ドイツ語
 の教授と一緒に探したが見つからず「ヨゼフはありませんね。誰か
 借り出していつてるのでしょう」と言われた思い出の書籍と考えら
 れる。

「信大書庫D」は表紙に「THOMAS MANN JOSEPH UNT
 SEINE BRÜDER」とあるように、ドイツ語の原書である。「松本高
 等学校図書印」が確認できる。

3 「松本時代の北杜夫」の主な関連内容(ページ)

○ 資料9「其の二」(P.134-143)に同じ。

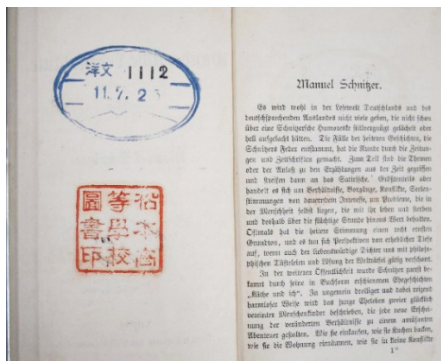
○ 資料10「其の三」(P.129-137)に同じ。

4 資料と関連する主な作品・叙述(ページ)

○ 「幽霊」(『北杜夫全集第3巻』)

・ 「もうひとつの挿話、それは学校の図書館の、書庫におい
 ての出来事であった(中略)「この棚ですよ」(中略)「ヨゼ
 フはありませんね。誰か借り出しているのでしょう」と教授
 がいった」(P.106)

・ 「ひとつは遠い昔の記憶をよみがえらせること、ひとつは
 リューベックの作家を嘆賞すること、他のひとつは、名も知
 らぬ少女に対する恋情ともつかぬ憧憬である」(P.113)



信大書庫E-2 レクラム文庫(2)



信大書庫E-3 レクラム文庫(3)



信大書庫E-1 レクラム文庫(1)

資料12
信大書庫E
レクラム文庫

1 撮影日

信大書庫E-1レクラム文庫(1) 平成30・6・11

信大書庫E-2レクラム文庫(2) 平成30・6・11

信大書庫E-3レクラム文庫(3) 平成30・7・30

2 資料の紹介

「信大書庫E-1・2・3」のレクラム文庫はドイツのレクラム(Reclam)が創始した廉価な文庫本で、正称は「世界文庫」である。岩波文庫はこれに範をとった。

3 「松本時代の北杜夫」の主な関連内容(ページ)

○ 「其の二」「二、初期詩篇等の様相 4 精神的思春期(1) 読書への没頭」(PP.133-134)

4 資料と関連する主な作品・叙述(ページ)

○ 「どくとるマンボウ青春記」(『北杜夫全集第13巻』)

・ 「中学生はやがてふたたび彼の姿を見出す。高校生は一本の樹木の根元に腰を下ろして、今から思えばレクラム文庫らしい本を開いているのだ。中学生はそれを横目に見て、かたわらを過ぎてゆく(中略)その中学生というのはこの私である」(PP.78)

○ 『神々の消えた土地』

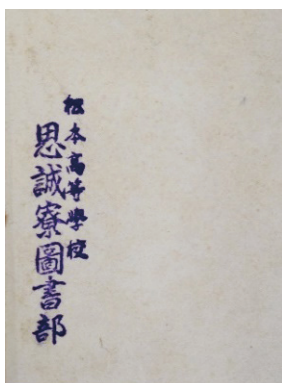
・ 「監視人がいなくなると、五分も経たないうちにすぐ止めてしまった(中略)それは私の知らない横文字の文庫で、のちになってレクラム文庫だと教えられた」(P.109)

・ 「二人が長髪の男に向って言った。それは最初の日、防空壕掘りをせずにレクラム文庫を読んでいた男だった」(P.139)

資料13 信大書庫F 『芥川龍之介全集』



信大書庫F－1『芥川龍之介全集』(1)

信大書庫F－2
『芥川龍之介全集』(2)信大書庫F－3
『芥川龍之介全集』(3)

1 撮影日

信大書庫F－1『芥川龍之介全集』(1) 平成30・6・11

信大書庫F－2『芥川龍之介全集』(2) 平成30・6・11

信大書庫F－3『芥川龍之介全集』(3) 平成30・6・11

2 資料の紹介

現在確認できる『芥川龍之介全集』(岩波書店)は八冊である。傷みが激しく、多くの松本高校生に読まれたことであろう。扉左下部には「松本高等学校思誠寮圖書部」の印がある。

杜夫は「IV「ともしび」時代」(『壮年茂吉』)に「私が旧制高校へ入って理科少年から文学青年に変貌したとき、もともと好きだった日本人作家が芥川であった。寮の図書室にあった全集というものを生れて初めて読んだのを覚えている」(P.225)と記している。また、芥川が茂吉の患者として処方されていたことや、杜夫が生まれた昭和二年に亡くなっていることも「異様な親近感をともなう迫ってくるのだ」と「芥川龍之介と私」(「人間とマンボウ」『北杜夫全集第15巻』(Pp.76-77))に記している。

3 「松本時代の北杜夫」の主な関連内容(ページ)

○ 「其の二」「初期詩篇等の様相」(P.134)

4 資料と関連する主な作品・叙述(ページ)

○ 『壮年茂吉』(P.225)

○ 「好きな箴言」(『北杜夫全集第15巻』)

・ 「機知に対する嫌悪の念は人類の疲労に根差している。(芥川龍之介) 芥川は近代日本作家の中で、もっとも機知という言葉にふさわしい武器を使用した数少ない作家であった」(P.79)

初期作品関連資料一覧表（１）

資料撮影者：竹内 正

資料番号			表題	撮影日	「松本時代の北杜夫」の主な関連内容(P.)	資料と関連する主な作品・叙述(P.)
I (資料 1)	中野	1	中野宅(1)	平成29.9.22	<ul style="list-style-type: none"> ・「其の一」(P.37, P.59) ・「其の二」(PP.130-131, P.132, PP.143-157) ・「其の三」(P.121) 	<ul style="list-style-type: none"> ・『北杜夫全集第5巻』(PP.238-240) ・『北杜夫全集第13巻』(PP.66-68, PP.90-91) ・『茂吉晩年』(PP.119-130)
	中野	2	中野宅(2)	平成29.9.22		
	中野	3	中野宅(3)	平成29.9.22		
	中野	4	中野宅(4)	平成29.9.22		
II (資料 2～ 6)	美A	1	三城牧場(1)	平成30.6.10	<ul style="list-style-type: none"> ・「其の一」(P.57) ・「其の二」(P.129) ・「其の三」(P.99, P.120) 	<ul style="list-style-type: none"> ・『寂光』(P.17, PP.130-132) ・『北杜夫全集第1巻』(P.142) ・『北杜夫全集第3巻』(P.29) ・『神々の消えた土地』(P.176, P.179, P.184, P.185, P.186, P.187)
	美A	2	三城牧場(2)	平成30.6.10		
	美A	3	広小場(1)	平成30.6.10		
	美A	4	広小場(2)	平成30.6.10		
	美B	1	登山道(1)	平成30.6.10	<ul style="list-style-type: none"> ・美A-1, 2, 3, 4に同じ 	<ul style="list-style-type: none"> ・『北杜夫全集第1巻』(P.41) ・『神々の消えた土地』(P.191, P.192) ・『北杜夫全集第3巻』(P.29, P.91)
	美B	2	登山道(2)	平成30.6.10		
	美B	3	展望コース	平成30.6.10		
	美B	4	西側斜面	平成30.6.17		
	美C	1	王ヶ頭ホテル前	平成30.6.17	<ul style="list-style-type: none"> ・美A-1, 2, 3, 4に同じ 	<ul style="list-style-type: none"> ・『北杜夫全集第3巻』(P.93) ・『神々の消えた土地』(P.192, P.194, P.195, P.197) ・『北杜夫全集第13巻』(P.37, P.82)
	美C	2	イワツバメ	平成30.6.17		
	美C	3	王ヶ頭石神像	平成30.6.17		
	美C	4	昭和20年代王ヶ鼻	平成30.7.30		
	美D	1	キバナノコマノツメ	平成30.6.16	<ul style="list-style-type: none"> ・「其の一」(PP.51-54) ・「其の二」(P.129, P.132) 	<ul style="list-style-type: none"> ・『北杜夫全集第3巻』(P.30) ・『神々の消えた土地』(PP.161-162, PP.195-196)
	美D	2	王ヶ鼻	平成30.6.16		
	美D	3	王ヶ鼻から北アルプス	平成30.6.17		
	美D	4	王ヶ鼻の石神像群	平成30.6.16		
	徳本	1	西穂高岳	平成30.7.31	<ul style="list-style-type: none"> ・「其の一」(PP.37-38) ・「其の二」(PP.127-128) 	<ul style="list-style-type: none"> ・『北杜夫全集第3巻』(P.96, P.101) ・『北杜夫全集第13巻』(P.89)
	徳本	2	明神岳と西穂高岳	平成30.7.31		
	徳本	3	徳本峠小屋(1)	平成30.7.31		
	徳本	4	徳本峠小屋(2)	平成30.7.31		

初期作品関連資料一覧表 (2)

資料撮影者：竹内 正

資料番号			表題	撮影日	「松本時代の北杜夫」の主な関連内容(P.)	資料と関連する主な作品・叙述(P.)
Ⅲ (資料7)	北文庫	1	『希臘羅馬神話』(1)	平成29.9.22	・「其の一」(P.51)	・『北杜夫全集第1巻』(P.158) ・『幽霊』,『神々の消えた土地』,「幼いメルクリウス」,「牧神の午後」等
	北文庫	2	『希臘羅馬神話』(2)	平成29.9.22		
	北文庫	3	書架	平成31.3.28		
Ⅳ (資料8～13)	信大書庫A	1	書架(旧松)	平成30.6.11	・北文庫1, 2, 3に同じ	・『北杜夫全集第1巻』(P.27) ・『神々の消えた土地』(P.145)
	信大書庫A	2	『ギリシヤ神話論考』	平成30.6.11		
	信大書庫A	3	『ギリシヤ神話論考』等	平成30.6.11		
	信大書庫A	4	『希臘英雄譚』	平成30.6.11		
	信大書庫B	1	『マルテの手記』(1)	平成30.6.11	・「其の一」(P.36) ・「其の二」(PP.134-143) ・「其の三」(PP.129-133)	・『壮年茂吉』(P.58)
	信大書庫B	2	『マルテの手記』(2)	平成30.6.11		
	信大書庫B	3	『マルテの手記』(3)	平成30.6.11		
	信大書庫B	4	『マルテの手記』(4)	平成30.6.11		
	信大書庫C	1	『魔の山』(1)	平成30.6.11	・信大書庫B「其の二」(PP.134-143)に同じ ・「其の三」(PP.129-137)	・『北杜夫全集第13巻』(P.61, P.131)
	信大書庫C	2	『魔の山』(2)	平成30.6.11		
	信大書庫C	3	『魔の山』(3)	平成30.6.11		
	信大書庫D	1	『ヨゼフとその兄弟』(1)	平成30.7.30	・信大書庫B「其の二」(PP.134-143)に同じ ・信大書庫C「其の三」(PP.129-137)に同じ	・『北杜夫全集第3巻』(P.106, P.113)
	信大書庫D	2	『ヨゼフとその兄弟』(2)	平成30.7.30		
	信大書庫D	3	『ヨゼフとその兄弟』(3)	平成30.7.30		
	信大書庫E	1	レクラム文庫(1)	平成30.6.11	・「其の二」(PP.133-134)	・『北杜夫全集第13巻』(PP.7-8) ・『神々の消えた土地』(P.109, P.139)
	信大書庫E	2	レクラム文庫(2)	平成30.6.11		
	信大書庫E	3	レクラム文庫(3)	平成30.7.30		
	信大書庫F	1	『芥川龍之介全集』(1)	平成30.6.11	・「其の二」(P.134)	・『壮年茂吉』(P.225) ・『北杜夫全集第15巻』(P.79)
	信大書庫F	2	『芥川龍之介全集』(2)	平成30.6.11		
	信大書庫F	3	『芥川龍之介全集』(3)	平成30.6.11		

参考文献

- 1 『北杜夫全集』全十五卷(新潮社、昭和51・9・25～昭和52・11・25)
- 2 『齋藤茂吉全集』全三十六卷(岩波書店、昭和48・1・13～昭和51・4・30)
- 3 北杜夫『神々の消えた土地』(新潮社、平成7・9・1)
- 4 北杜夫『歌集 寂光―北杜夫若年歌集』(中央公論社、昭和56・4・20)
- 5 北杜夫『青春詩集 うすあおい岩かげ』(中央公論社、平成5・10・25)
- 6 北杜夫『青年茂吉』(岩波書店、平成3・6・27)
- 7 北杜夫『壮年茂吉』(岩波書店、平成5・7・29)
- 8 北杜夫『茂吉彷徨』(岩波書店、平成8・3・8)
- 9 北杜夫『茂吉晩年』(岩波書店、平成10・3・16)